

令和 3 年 5 月 27 日現在

機関番号：11601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K16899

研究課題名(和文)福島県中通り・浜通り地方を対象とした近世地域史研究とその基盤整備

研究課題名(英文)The Study of the Early Modern Local History and Developing Basic Historical Resources in the Central and Coastal Area of the Fukushima Prefecture

研究代表者

小松 賢司(KOMATSU, Kenji)

福島大学・人間発達文化学類・准教授

研究者番号：00712621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現福島県中通り・浜通り地方を対象として、史料群の所在確認や調査・整理など研究の基盤整備に重点を置きつつ、その成果をもとに近世地域史研究の進展を目指そうとするものである。その成果は以下のものである。対象地域の自治体史等に掲載された近世史料の情報をデータ化した。三春城下中町川又家文書の整理を行い、目録を刊行した。三春中町川又家が町役人として三春藩との間で取り結んだ関係や、塩問屋として生産者・荷主・町内塩商人などと取り結んだ関係を明らかにした。非領国地帯の信達地方について、領主支配の規定性を重視する視点から地域社会を分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近世地域史研究の停滞状況を克服するためには、領主支配の規定性を十分に踏まえながら、各地域社会の特質部分に徹底的にこだわり、各地の事例を典型的に把握することが必要である。様々な領主支配の形態が併存する一方、領域間相互の経済的な繋がりが強い現福島県中通り・浜通り地方は、上記の課題に迫るために有効なフィールドであるが、研究環境が他地域に比して著しく立ち後れている。こうした現状を踏まえ、近世地域史研究を進展させるための基盤を一定程度整備した。あわせて今後の研究の進展に資する論点を抽出することができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to progress the local history of early modern Japan based on the results of developing basic historical resources while focusing on checking whereabouts of local historical documents and investigating unorganized ones in the Central and Coastal Area of the Fukushima Prefecture. The results are as follows: 1) Converting information of the historical documents that had been published in the books of local history of where the researcher investigating into data. 2) Investigating the Documents of Kawamata Family in Nakamachi of the Miharu Castle Town and publishing the catalog of it, 3) Studying the relationships of Kawamata Family as the town officer between the Miharu Domain and as the salt wholesaler between producers, senders and retailers in Miharu Town, 4) Examining early modern regional society of Shintatsu Area where the non-domanial region from a perspective that emphasizes prescriptiveness of the rule of daimyo lords and shogunal intendants.

研究分野：日本近世史

キーワード：地域史 地域社会 村落 史料 福島県

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本近世地域史研究は、特に 1990 年代まで、社会の「自律性」を重視し、そこに「公共性」や近代の萌芽を見出す研究が盛んであった。2000 年代以降は、そうした右肩上がりの単純な歴史像を克服すべく、対象地域を限定し、社会の実態に肉迫しようとする研究が盛んとなった。それにより研究は格段に精緻になったが、一方で研究が個別事例分析の域を出ず、議論の停滞を生んだことも否めない。こうした現状を克服するために、研究代表者は、領主支配の規定性を十分に踏まえながら、各地域社会の特質部分に徹底的にこだわり、特質を生み出す要因を究明することを通じて、各地の事例を典型的に把握することが必要であると主張している(小松『近世後期社会の構造と村請制』校倉書房 2014 年)。

研究代表者は、現福島県域の中通り・浜通り地方を対象フィールドとして近世地域史研究を展開し、上述の課題に迫ろうと考えた。当該地域は中小藩領や幕府領が混在し、様々な領主支配の形態が併存する一方、領域間相互の経済的な繋がりが強く、特に北部の福島盆地在り全国有数の養蚕地帯として発展を遂げるなか、その影響が領主支配を越えて広範囲に及び相互作用を生み出しており、領主支配の規定性を踏まえながら、各地域社会の特質部分に徹底的にこだわり、事例を典型的に把握するために非常に有効なフィールドである。

しかしながら当該地域は、元々良質で豊富な近世史料が存在していたにもかかわらず、現在では研究を進めるための環境が他地域に比して著しく立ち後れてしまっている。1970 年代に『福島県史』の編纂が完了して以降、県による史料収集は積極的とは言えず、市町村レベルにおいても、数十年前の自治体史編纂時の収集史料がそのまま役所に「死蔵」されていたり、原所蔵者への史料の返却後に状況確認を行っていない自治体がほとんどであり、さらには近年の市町村合併や専門職員の人員削減などで、情報が引継がれていない場合も多い。研究の素材となる史料の情報が容易に得られない当該地域において、近世地域史研究を進展させていくためには、研究の基盤整備がまず何より必要であった。

2. 研究の目的

本研究は、現福島県中通り・浜通り地方を対象として、史料群の所在確認や調査・整理など研究の基盤整備に重点を置きつつ、その成果をもとに近世地域史研究の進展を目指そうとするものである。具体的な目的としては、以下の 3 点を設定した。

- (1) 近世史料の所在情報の集約
- (2) 未整理史料および再整理が必要な史料の整理
- (3) 対象地域の近世史料を用いた地域史研究の進展

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、以下のような研究方法を用いた。

- (1) 近世史料の所在情報の集約

『福島県史』および対象地域の市町村史の史料編に掲載されている近世史料について、表題・作成年月・史料の原表題・文書群名をすべてデータ化する。そのうえで、文書群名によってデータを統合し、文書群ごとに活字化された史料の情報を整理する。文書群名は自治体史によってその名称が異なるため、掲載された史料を 1 点ずつ確認することで統合を進める。また自治体史によっては、大部な史料の一部を、あたかも独立した 1 点の史料のように掲載している場合もあり、そうした史料についても原型を復元し、史料群ごとの情報に落とし込んでいく。

こうして作成した史料群ごと情報を、各自治体の専門職員や担当職員に確認してもらうことで、各文書群の現状を確認していく。

- (2) 未整理史料および再整理が必要な史料の整理

現田村郡三春町の三春城下中町川又家文書は、三春町歴史民俗資料館に寄託されながら、未整理のままになっており、これまで市町村史にも収録されることがなかった。この文書に群ついて、現状調査、保存措置、目録作成、写真撮影を行う。

現伊達市の梁川町有文書は、史料が複数施設に分割して収蔵されていて、全体像が把握されていなかった。この文書群について、『梁川町史』編纂時の目録との照合を行う。

現伊達市の伏黒村富田家文書は、ほぼ未整理のまま福島大学附属図書館に収蔵されていた。この文書群について、『伊達町史』編纂時の仮目録と照合しつつ、整理作業を行う。

新たに所在が確認された現東白川郡棚倉町の棚倉城下井上家文書について、保存措置・目録作成などを行う。

(3) 対象地域の近世史料を用いた地域史研究の進展について

三春城下中町川又家文書のうち、整理作業の完了したものを素材として、地域史研究を進めていく。

現福島市域、伊達市域を中心に、上記の作業によって所在が確認された史料を用いて、地域史研究を進めていく。

4. 研究成果

(1) 近世史料の所在情報の集約

対象地域の市町村史の史料編に掲載されている近世史料について、そのデータ化を完了させた。史料群ごとの情報統合には未だ不十分な点があり、今後もさらなる確認作業が必要だが、これにより自治体担当者への史料所在確認が容易かつ正確になった。しかし実際に確認を行うと、所蔵していた家自体がすでに存在しないなど、所在確認が困難なものも多く、専門職員が不在の自治体もあって、網羅的な所在確認は完了できなかった。データベースは将来的な公開を目指しているが、現時点では課題も多く、今後も検討を続けていく必要がある。

(2) 未整理史料および再整理が必要な史料の整理・再整理

三春城下中町川又家文書については、目録第1集を刊行することができた。梁川町有文書および伏黒村富田家文書については、整理作業の成果を当該自治体と共有することができた。

(3) 対象地域の近世史料を用いた地域史研究の進展

川又家文書を用いた研究成果として、川又家が町役人として三春藩との間で取り結んだ関係とその変化を明らかにした論考(「三春中町川又家と三春藩」(『福島大学人間発達文化学類論集』28、2018年))と、同家が塩問屋として生産者・荷主・町内塩商人などと取り結んだ関係とその変化を明らかにした論考(「浜通り 中通り間における塩流通と三春町塩問屋」(『福島大学人間発達文化学類論集』31、2020年))を公表することができた。これにより、三春城下町を中心とした地域史研究、および阿武隈高地を介して複数の支配領域にまたがる物流を切り口とした、より広い範囲の地域を対象とする研究について、それを進展させる為の見通しを得ることができた。

信達地方と呼ばれる現伊達市域・福島市域およびその周辺について、先行研究で明らかにされている養蚕業の発展を前提に、商品や労働力・資金などの経済的な繋がりを分析した。当該地域は領主支配の錯綜する非領国地帯であり、これまでの研究では領主支配の規定性が軽視されてきたが、実際には、役負担の論理が労働力の有り様を大きく規定し、幕府の経済政策が領主支配を越えて波及するなど、その規定性の強さを確認することができ、近世地域史研究の課題に迫り得る論点を見出すことができた。中でも、奥州街道の宿場町が役負担の論理を前提に、周辺社会に社会的・経済的な影響を及ぼす点については、学会報告(「宿場の社会構造」2017年度福島大学史学会大会講演)を行うことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 小松賢司	4. 巻 28
2. 論文標題 三春中町川又家と三春藩	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福島大学人間発達文化学類論集	6. 最初と最後の頁 118-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小松賢司	4. 巻 815
2. 論文標題 福島の風土と地域史研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 104-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小松賢司	4. 巻 31
2. 論文標題 浜通り 中通り間における塩流通と三春町塩問屋	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福島大学人間発達文化学類論集	6. 最初と最後の頁 94-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小松賢司
2. 発表標題 宿場の社会構造 - 奥州街道瀬上宿を中心に -
3. 学会等名 福島大学史学会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小松賢司
2. 発表標題 享保期の三春城下町
3. 学会等名 近世村落史研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小松賢司	4. 発行年 2021年
2. 出版社 三春町歴史民俗資料館・福島大学人間発達文化学類日本史学研究室	5. 総ページ数 120
3. 書名 三春城下中町川又家文書目録 第1集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------